

随筆

今年の干支 乙未の話

(一社)石川県建設業協会 監事 松田 正

今年は未(ヒツジ)年、干支では「乙未(きのとひつじ・いつび)」である。

「未」は、十二支の8番目。方位は南南西よりやや北寄り(南西微南)。月では旧暦6月(今年は7月16日が旧暦の6月1日である)。時は午後1時から午後3時まで。

「未」は『漢書』律歴志によると「昧」(まい:「暗い」の意味)で、植物が鬱蒼と茂って暗く覆うこととされ、『説文』によると「味」(み:「あじ」の意味)で、万物が成熟して滋味が生じた状態をあらわしているとされる。五行は土気、陰陽は陰。

未年の守り本尊は「大日如来」。「大いなる日輪」という意味で、あらゆる仏の中で、最高位にあると言われる。真言密教の教主で、宇宙の万物の智慧と慈悲の表徴。未年の人、この守り本尊を身近に置けば心安らかな日々が暮らせるとされる。

歳徳神(としとくじん)が在する「恵方(えほう)」は、十干で決まるが、未の年は「庚」の方向で、西西南である。初詣や節分の恵方巻丸かじりの風習は既に紹介しているので省略する。泉鏡花の兎で知られる「向かい干支」についても詳細は省くが、未の向かい干支は「丑」で、守り干支とも呼ばれる。

「未」に擬せられた動物は、羊(ヒツジ)である。
【羊】

ヒツジは、古く紀元前8000年前(新石器時代)から家畜化され、今日、皮、肉と脂肪、毛、乳など多様に使われている。古い羊文化は、漢字にも多大な影響を示し、「羊」を部首とする字は数多いが、“羊、祥也”(説文解字)とあり、羊を含む美、善、義、鮮など良いイメージの字が多いという。地球上冷涼な気候の地域に広く分布し、世界の飼育数は約10億頭といわれ、国連食糧農業機関の2012年資料では、中国(187百万頭)、インド(75百万頭)、オーストラリア(74百万頭)が上位3カ国。日本には6世紀に入った記録があるが、家畜

化されたのは湿潤な環境に馴染まなかったこともあり遅く、明治に入ってからである。現在北海道を中心に約1万2000頭(2010年)という。宝暦大火(1759年)後の後期金沢城図(鶴丸緑地休憩館展示)を見ると金谷御殿(現在の尾山神社)に綿羊小屋の記載があり、1830年頃に竹澤御殿から移されたとの説明があった。加賀藩では早くから飼われていたようだ。



金谷御殿の「綿羊小屋」

羊は愚かなイメージがあるが、IQは牛と同程度、聴力が良く、視力は270度から320度で頭を動かさずに自分の背後を見ることが出来る。群れたがる性質を持ち一緒に動く傾向があり飼育しやすい。品種は約3000種、主として羊毛用と肉用に分けられる。羊毛用の羊は、年に一回晩春毛を刈られる。野生の羊の毛は抜け替わるが、毛を長くするように改良を重ね飼育された羊は、毛を刈らないと重く(通常1頭から1回約5kgの毛がとれる)歩けなくなったり皮膚病になったりするという。

「羊の毛刈る」は春の季語になっている。

【未年の性格】

ネットで調べると沢山紹介されている。基本性格は、「じっと周りの行動を観察しどう動くべきか考える」で、「人当たりがよく温和」「親切」「慎重」「堅実」「忍耐強い」「芯が強い」「争いや対立を好まない」などがあげられている。

毎年紹介する「中国の十二支動物誌」により未

年生まれの性格を総括すると、「おとなしい」「善良」「正直」「上品」「思いやりがある」「他者を理解することが出来る」「自制心がある」「忍耐力がある」「出し惜しみしない」「人助けをする」「誠実」と人格者の見本と高く評価し、欠点として「センチメンタル」「余り楽観的でない」「回りくどい」と指摘している。

【乙未の年】

前回の乙未の年は、1954年（昭和29年）で、目立った事件は、正月皇居参賀時に二重橋上で大混乱し死者16人を出した。ピキニ環礁での水爆実験で第5福竜丸が被災した、その前の1894年（明治27年）は日清戦争が始まった年である。

十二支を使った相場の格言（「辰巳（たつみ）天井、午（うま）尻下がり、未（ひつじ）辛抱、申酉（さるとり）騒ぐ。戌（いぬ）笑い、亥（い）固まる、子（ね）は繁栄、丑（うし）つまずき、寅（とら）千里を走り、卯（うさぎ）跳ねる」）では、未年は辛抱の年となる。

【羊が一匹】

目がさえて眠れないという経験を持つ人は多い。こんな時に「羊が1匹、羊が2匹、…」と数えていくと眠れると言われ試みたことがある。これは、イギリスから来ているようで、SheepとSleepの発音が似ていて生まれたものだという。世界各国で使われているようだ。自分の場合は余り有効でなく、枕元の書物を読むのが一番手っ取り早い。

【迷える羊：Stray Sheep】

漱石の「三四郎」で、ヒロインがつぶやく言葉として使われ、若い三四郎を悩ませる言葉として知られる。この言葉は、聖書が出典で、新約聖書で「100匹の羊を飼う羊飼いは、そのうち1匹が迷い出たら、99匹を放置しても、迷った1匹の羊を探して救うことを喜ぶだろう」（マタイ伝18章、ルカ伝15章）という比喻からきている。羊飼いは主キリスト、羊は人類全てであり、99人の迷わぬ人（信仰を持つ人）のためより、1人の罪人を悔い改めさせることを主は喜ぶの意である。また、ユダヤ教の正典である旧約聖書では「流浪・離散するイスラエル民族の比喻として用いられる」（イザヤ書53章など）という（岩波全集注解）。小説「三四郎」の最後の文章は、三四郎が「ストレイ・シープ」と繰り返しつつつぶやく言葉で終わる。

【ひつじの名がつく物象等】

ひつじ雲

ひつじ雲は「高積雲」（2～7km）で、秋に出る高い空に形や大きさの揃った小さな雲が等間隔で広がり、ひつじの群れのように見えることから名が付けられた。更に高い巻積雲（5～13km）は、固まりが小さめで魚の鱗状になり「うろこ雲」「いわし雲」（英語ではサバ雲と呼ばれる）と呼ばれる。「羊雲が出ると翌日は雨」（うろこ雲の場合は3日後）の諺があり、これらの雲が出ると雨になる確率は70%というから高い。



ひつじ雲（Wikipediaより）

ひつじ草（未草）

睡蓮の一種で日本全国の池沼に広く分布する。白い花で花期は6月から11月。未の時刻（午後2時）に咲くのが名の由来と言うが、実際は朝から夕刻まで咲く。夏の季語である。

名に勝ちし白き気高きひつじ草



ひつじ草（睡蓮、奥卯辰山健民公園）

羊羹

私もそうだが、羊羹と羊の関わりを不思議に思う人は多いようでネットで調べると解説がある。中国では羊の肉の羹（あつもの）を羊羹という。羊肉のスープだが冷えるとゼラチンで固まる。鎌倉時代禅僧によって伝えられたが、肉食が御法度で精進料理として羊肉の代わりに小豆を用いたものが由来という。別説では、中国に小豆を用いた

肝臓状の菓子があり「羊肝こう」というが、音が同じため、誤って「羊羹」として使われたともいう。

羊水

羊水は、子宮の羊水膜から分泌される液で、胎児は羊水の中に浮かんで成長する。成長に必要な成分の供給、細菌感染から守る、クッションの役割等の働きがある。名の由来は、英語 (amniion) の語源が、ギリシャ語「いけにえにする羊の血液を入れる入れ物」で、それに由来するというのが有力なようだ。

ピアノのハンマーヘッドは羊毛

ピアノの弦を叩くハンマーのヘッドは、羊のフェルトで出来ている。ピアノの音色を司る最も重要なパーツであり、ハンマーフェルトの羊毛の配合や硬度、密度によって音色や幅が変わるといいう。ハンマーヘッドの善し悪しがピアノの価値を決定的に決めることになる。近年、羊毛も気候の変動や酸性雨の影響で、品質の確保が難しくなっているという。

【善き羊飼いの教会:Church of the Good Shepherd】

世界の羊飼育数のベスト3は、前述の通りだが、7位がニュージーランドである。ニュージーランドの国土面積は日本の約70%であるが、人口僅か444万人(2012年)に過ぎず、これに対し、羊の飼育数は31百万頭と人口の約7倍、正に羊の国である。1位の中国は1.9億頭だが、人口は13億人だ。このニュージーランドに「善き羊飼いの教会」がある。マウント・クック(標高3754m)近くのテカボ湖という自然景観の素晴らしい大氷河湖のほとりに立つ1935年建立の小さな教会だ。この教会の名は、新約聖書ヨハネ伝(10章)の「善き羊飼いは羊のために命を捨てる」に由来する。Shepherd



善き羊飼いの教会

(シェパード)は、羊飼いの意で、主キリスト、保護者を意味する。我が国の調査捕鯨船の活動阻止で過激な行動を取る国際組織シー・シェパード(Sea Shepherd)は同じ名詞で、海の番人を誇示して我が国調査船を悩ませている。

【羊のことわざ】

群羊を駆りて猛虎を攻む：弱者も力を合わせれば強者を攻めることが出来る。

羊の皮を被った狼：外見はおとなしくしているが、本性は違うこと。

羊に虎の皮を着せたよう(虎の皮を被った羊)：弱いものが強がったり、愚かなものが利口ぶること、外見は強そうだが本当は弱いことの例え。

屠所の羊：自分の置かれている状況を知らないことの例え。

多岐亡羊：亡羊の嘆〔ぼうようのたん〕も同じ。枝道が多くて、逃げた羊を見失うことから、枝葉末節にとらわれると、本質を見失うこと。方針が多くてどうしてよいか迷うこと。出典『列士』

羊頭狗肉：羊の頭を看板に掲げ、実際は犬の肉を売ることから、見かけは立派だが内容がない、看板倒れ、裏表があることの例え。出典『晏子春秋』

午羊の目を以て他人を秤量するなかれ：自分の基準で他人を批判してはならないことの例え。

千羊〔せんよう〕は独虎〔どくこ〕をふせぐあたわず：弱いものが多数集まっても強いものには勝てないということ。

羊をして狼に将たらしむ：1匹の羊が多数の狼を率いるより1匹の狼が多数の羊を率いる方が強い意から、将軍、リーダーが強いほうがグループは強い例え。

亡羊補牢〔ぼうようほろう〕：羊に逃げられてから檻を補修しても手遅れだということから、失敗してから改めても後の祭りだということ。逆に、失敗した後でも改めれば取り返しがつくというプラス評価の意味でも使われるという。出典『戦国策』

羊の歩み：人の命が日々死に近づいていくことをたとえた言葉。

羊の群れにいるときは羊のように鳴き水牛の群れにいるときは水牛のように吠える：郷に入ったら郷に従う。(マレーシアの諺)

羊のように振る舞えば狼に喰われる：弱腰の姿勢は禁物。(イタリアの諺)